

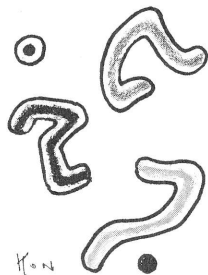
「社会力」をどうはぐくむのか

◎18歳成人が問う教育の見直し

いま、大人に育てるための教育とはいったいなんなのか…

池田知隆

教育ジャーナリスト



大人としての気構えを

日本の成人年齢が世界標準に合わせられることになりそうだ。18歳選挙権を積極的に推進した民主党が政権につき、成人年齢全体が18歳に引き下げられる動きが現実化している。世界の大半の国

は18歳を成人とし、先進国の中で成人年齢を20歳としているのは日本だけ。1989年に国連で採択された「子どもの権利条約」でも子どもを18歳未満と定義している。グローバル化の波を乗り切り、少子高齢化の時代をたくましく生き抜いていくために、日本の若い世代は大人としての気構えを早く持つように迫られている。

ところが現実には、この成人年齢引き下げに「日

本人はみんな幼くなっているのに、成人年齢を引き下げるのは心配だ」「酒やたばこ、ギャンブルの年齢制限が下がり、カード詐欺などの被害の恐れもある」といった戸惑いの声も多く聞かれる。社会が豊かになる中で上級学校への進学率や結婚年齢も高まり、「パラサイト・シングル」と呼ばれる親に依存し続ける独身の子どもたちや、結婚後も親を経済的にたより続ける人も少なくない。日本社会は、個人を成熟させられないほどに未熟な社会なのだろうか。そうではなく、人が未熟なままに生活できるほど、社会が豊かに成熟しているのだろう。

日本社会の中で人はいま、未熟なままでも生きていけるとはいえ、この先、大人としての成熟をしないでいいわけではない。18歳成人が世界的に定着していったのは、1960年代から70年代にかけて、世界中の若者たちが政治に関心をもち、行動していた時代だった。当時、日本でも大学紛争が巻き起こっていたが、成人年齢を引き下げる

論議は起きなかった。子どもに「添い寝」をし、「だっこ」して育てる日本独特の子育て文化に、経済的な豊かさが加わり、子どもたちに自立を迫るチャンスを逸してしまった。

これから成人年齢の引き下げで若者の自立心の向上を求めていくならば、それと同時に、子どもたちの自立の芽を奪ってきたこれまでの教育の大幅な見直しが求められる。

「市民教育」の場としての高校

いま、大人に育てるための教育とはいったいなんなのか。戦後、廃墟の中から驚異的な経済発展をなしたげた日本は、世界の国々の中で最も長寿で豊かな社会をつくりあげた。しかし、その長い人生を生きる日本の子どもたちは、「学びから逃避している」（佐藤学・東大教授）といわれている。先進国の中でも学校外で学習する時間が最も短く、

自ら主体的に学ぶ力、学習意欲を失いつつあるからだ。さらに2006年には進学高校の「世界史未履修」問題が表面化した。日本の現代史についても多くの中高生たちが学ばないままに育ち、日本の若者は、アジアや世界各地の青少年と現代世界について語り合うことを苦手にしている。「社会力」を「人が人とつながり、知恵を出し合い、よりよい社会をつくっていく力」とするならば、そんな人間の基礎的な「社会力」が衰退している。

18歳を成人とすると、高校3年生の内に選挙への投票権が与えられる。どんな社会を望ましく思い、その社会を形成していくためにどのような参加していくのか。高校は、そんな市民社会を形成していくための教育の最終段階を担わなくてはならなくなる。

これまで日本の学校では、政治教育をほとんど行っていない。政治教育とはなにも特定の政治思想を教育することではなく、実際の政治に関心を持ち、政治参加への行動へとつなげる教育の心が問われてくる。

「指導」から「支援」へ

その教育の見直しは高校にとどまらない。子どもが大人になるための準備期間に、どのような社会参加の機会を与えていたか、学校教育全体、家庭や地域にひきつけて考えざるをえない。家庭や学校では、受験戦争に打ち勝つことは教えても、社会参加についてはあまり関心を払ってこなかった。むしろ、危ないからあれをしてはだめ、これをしてはだめ、と自立の機会を奪ってきたのが現実だ。

教育には大きくいえば、「指導」と「支援」という二つの考え方がある。「指導」とは、人間をある理想的な姿にむけて教育していこう、という

ことだ。生徒たちは「公民」「政治経済」「現代社会」などの科目で三権分立などの知識としては学ぶものの、実際に社会に参加する活動をすることは少ない。学校もそれらを遠ざけてきたのが実情だ。しかし、子どもたちに自立を促し、社会参加の意識を育てていこうとすれば、体験的な教育が欠かせない。生徒会活動を活発にしたり、地域の課題を解決するためのボランティア活動に参加させたりするための新たなカリキュラムの工夫が急務となる。

さらに民法で18歳成人になった場合、高校生でも消費者として契約の主体になれる。悪徳商法やマルチ商法に巻き込まれる可能性が増え、若者たちはクレジット・カードの使い方などいろいろ学んでおかねばならない。知識だけではなく、実践的な消費者教育も求められる。

このように選挙の意義や取引・契約の権利と義務などは、教育内容の一つとして形式的に教えるだけではすまなくなっていくことは確実だ。一人

考え方だ。細かなカリキュラムを編成して、ある学年までにこれだけの知識や技術を身に付けさせようという決め、進めていこうとする。もうひとつの「支援」とは、個々人が自分で考え学んでいくのを手助けしていこうという考え方で、どんなことを学んで、どんな人になりたいのか、それを自分で考えさせて、援助するという方法だ。長年にわたって日本では、前者の子どもたちへの「指導」に重点を置き、子どもたちが決められたレールの上を走るような教育を行ってきたといえる。

だが、膨大な情報があふれ、激しく変動する社会の中で年功序列、終身雇用制などの日本型システムが崩れつつある。子どもたちがお手本になるような生き方を見つけにくくなった。そんな中で、いつまでも保護される子どもをままでいたい、という甘えの文化が家庭から社会に受け継がれ、いつしか「ニート」や「引きこもり」の増加という若者たちの非社会的な現象が広がっている。

18歳を成人とする背景には、未成年の犯罪に対

する「厳罰化」を求める風潮があるといわれるが、非社会的な若い人に自立を促す意義はやはり大きい。若い人たちが社会へ一歩踏み出すきっかけをどのように与え、支援していくのか。その際、そのことを共に考えていく姿勢こそがいま、大人に求められている。そのためにはまず、教育の重心を「指導」から「支援」へと移し、子どもたちに早くから主体的な学びを身につけさせることが欠かせない。

グローバル化と多文化社会

今後、グローバル化とともに多様な人々の移動が激しくなる。海外で長期間生活したあと帰国する子やさまざまな国から来日する子どもたちが加速度的に増え、各地で国際化が進んでいる。地域には、多様な生活習慣や価値観をもつ人々が混在し、互いの理解や寛容さが増えます。求められてい

ちは「顔が変わり、いきいきとする」という。「トライやる」のトライには、挑戦するという意味でのトライであり、学校、家庭、地域社会の「トライアングル」という思いが込められている。文部科学省は、職場体験学習や「キャリア教育」に力を注いでいるが、そのような地域とのつながりを深める試みはより広がっていかなくてはならない。いま、各地の介護の現場には、インドネシアやフィリピンから若者たちがやってきている。日本語が不十分でも、慣れない日本の施設などで懸命に働いているアジアの若者たちの姿は美しい。そのような外国の若者を受け入れ、共に生活し、支えあっていく多文化社会をどうつくっていくのか。日本の若者の育成も、外国からの若者の受け入れもすべては地域社会の支援があつてのことだ。

公教育を豊かに



く。そのとき最も大切なのは、他人に対する想像力と対話していく力であり、異質な人々を受け入れ、共に生きていくための「社会力」だ。

子どもたちが社会の中で働く多彩な大人たちと出会う機会を増やそうと、兵庫県では長年、すべての公立中学校の2年生に1週間、地域の中で社会参加や職場体験をおこなう「トライやる・ウィーク」が続けられている。子どもが好きな中学生は保育園で幼児と向き合い、ファストフードの店で働いてみたいという生徒はその厨房に入って、ポテトフライを揚げている。知らない大人のなかで1週間過ごし、職場体験することで、中学生た

大人になるとはなにか。それを成熟していくことだとすれば、年齢を重ねることで人間としてのやわらかさ、しなやかさ、他人を受け入れる力をそなえていくことだろう。多文化社会の中では、様々な人たちと対話し、いい関係を作りあげていくことによって人は大人になっていく。

経済格差が広がり、自己責任が叫ばれ、私生活中心主義が横行していく中で、公共心は希薄化しがちだ。しかし、だからこそ個人と社会を考える「公教育」の役割をもっと見直し、子どもたちの「社会力」をはぐくむことにもっと時間と労力をつぎ込まないといけない。次回の選挙においてインターネットの積極的な活用が検討されているが、アメリカの大統領選挙などでは若者たちによるネットを通じた政治参加で大きな変革が起きた。18歳成人論議を通して、若者が自立意識に目覚め、政治・社会・文化のさまざまな分野での新しい流れを生み出すようになればいい。

【特集】

「大人」に育てる

「社会力」をどうはぐくむのか 池田知隆 8 教育ジャーナリスト

▼18歳成人が問う教育の見直し

「大人」に育てる 新堀通也 14 武庫川女子大学名誉教授

▼子どもと大人

泣いて笑って、怒られて、感動する日々 村林新吾 20 三重県立相可高校専門調理師・教諭

▼三重県立相可高校食物調理科の「調理師の卵」たち

大人になりたくない子どもたち(上) 倉光弘己 28 学校法人芦屋学園理事

▼どうしたら一人前になるの？

図書館には新しい発見がある 竹原泰三 38 ジャーナリスト

【連載】

非行の予防学 ⑮ 友だちとの関係と非行2 佐々木光郎 48

ウイニコットの心理臨床論からの新しい展開 ⑮④ 川上範夫 64

僕たちのドーナツトーク ⑮⑥ 学校では教えてくれない「ホウ・レン・ソウ」 田中俊英 40

木陰の物語 ⑮ 身近な人へ 団 士郎 34

映画で観る子どもと社会 ⑮④ 富田和巳 54

せめぎあつて おりあつて おたがいさま ⑮③ 富田富士也 44

生涯一年生教師物語 ⑮② 鹿島和夫 70

こちら子ども未来研究室！ ⑮① 友だちの家 宮崎次郎 42

- 松葉健の4コマ漫画廊 27
- やじうまんが／篠原ユキオ 47
- さまよう少年たち／竹下玄恭 69
- 少年非行の豆事典 19
- 情報サテライト 26・46
- 平成21年『月刊少年育成』の総目次 85

- バックナンバー 61
- 告知板 33・60・89
- いくせい流川柳 62
- グラビア 3
- 青少年に関するニュースと評論 79
- 編集後記 90